

日本社会心理学会会報

220 号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:藤島 喜嗣)

2019 年 10 月 4 日

日本社会心理学会第 60 回大会へのお誘い

西田 公昭

会員の皆さまにおかれましては、ますます御清祥のことと御喜びを申し上げます。今年の大会につきましては、開催日程の確定が諸般の事情で遅くなり、申し訳ありませんでしたが、来たる 11 月 9 日(土曜日)、10 日(日曜日)に立正大学品川キャンパスにて開催する準備を万事滞りなく進めております。本学は、某新興宗教が母体だとよく誤解されがちですが、長き伝統を誇る日蓮宗を母体としており、2022 年には創立 150 周年を迎える歴史ある大学です。もちろん心理学部はどこもまだ歴史が浅いわけですが、それでも本学は全国的に 2 番目で比較的に歴史があります。なお今大会の準備委員会を引き受けております対人・社会心理学科は 2011 年に開設し、また大学院の修士課程や博士課程も併設しており、ようやく体制を完成させたところでございます。

ところで、今回の大会は第 60 回ということでありまして、学会の歴史を振り返っての私感を申し上げて恐縮ですが、先の諸先生たちが、文学部、教育学部、社会学部といった大地に、社会心理学の種をまき、それが半世紀を経る間に、専攻やコース設置へと発展し、2011 年に設立した本学科のように、ようやく専門の学部や学科の設置へと結実してきたことに感慨深く思っています。しかし、これまた私見ですが、どうかすると第 100 回大会までには、本学問よりもいっそう要素的なアプローチや、あるいは逆に、いっそう統合的なアプローチをとる研究から押されて独自のアイデンティティを失い、他の分野に統合されてしまうかも知れないと、思ったりしています。そこで、この大会では、「顧みて明日を築く」のスローガンを掲げて、これからの社会心理学研究の行方を共に考える機会にしたいと思っています。各自がこれまで自分や周辺の研究の意義を見つめ、今後どんな研究を進めていくべきなのか、そんな思いにふけりながらも大いに議論をしていただきたいと思います。

さて、そんなスローガンに対応して、大会企画シンポジウムを「愛と正義と暴力と:過激主義の社会心理学」というテーマで開催いたします。企画の理由は、このテーマを通じて社会心理学が一つの“時代のニーズ”に応えるべく研究していることのアピールです。もちろん、自分は特段に過激主義なんて何も研究していないので関係ないと思われる会員もいるかと推察します。しかし、そうでしょうか。例えば、ですが、外国人や異人種を含む他者について、また異文化や現代社会について、人々はどのように認知して評価しているのか、個人や国家がコミュニケーションを通じて他者と平和的に向きあうにはどうすればいいのか、好まない暴力的な解決を避けて相互に幸せになれる知恵はないのか、個人間や集団間の利害関係において信頼や公正がどのように関係しているのか、そして暴力の被害者を生んでしまうと彼らをどのように支え、社会はどう変貌するのか、といったふうに考えていくと、自己過程、対人認知や社会的認知、自己呈示や対人関係、コミュニケーション、ソーシャルサポート、異文化、社会的適応、メディアと宣伝、攻撃行動や犯罪行動、集団過程、コミュニティなど、どこもかしこも社会心理学の伝統的テーマとつながります。つまり、どの会員の研究も間接的であってもこのテーマと重なり合うのではないのでしょうか。顧みて明日を築く、というスローガンは、そんな自分の研究成果がいつか明日の世界に貢献するという信念を形成、発展させることにもあるのではないかと思います。少子化や隣接領域の発展などで大学でのポストが減る懸念がある中、当学会が衰退せず、益々の発展をするためには、皆がこのような意識を抱いて社会一般にアピールして、社会心理学科などの設置を新たに増やす努力が大事ではないでしょうか。

このようなシーンを精一杯盛り上げるべく、大会準備委員一同は、一丸となって、“おもてなし”の準備に励んでおります。なお、このプログラムは立正大学心理学部の公開講座にして共同開催とさせていただき、一般社会にも発信する予定です。ただ、いくつか申し訳なく思っているところがございます。まずは懇親会ですが、とても残念なのですが、こちらでは用意できませんのでどうかご容赦ください。本学品川キャンパスの界限には、和食、洋食から渋い居酒屋、中華やエスニック料理など、気の利いた様々な大小宴会場が沢山ございますのできっといろんな条件に合った場所が見つけれられると思います。そして、総会では施設の事情で弁当を提供できません。それで従来とは異なりまして、午前中から、大会企画シンポジウムを実施し(初日 10 時 45 分-12 時 45 分)、総会は午後遅くに実施することにいたしました(初日 15 時 15 分-16 時 45 分)。なおご迷惑を



主たる会場となる立正大学品川キャンパス9号館

おかけすると思われますのは、その頃、大学構内の建設工事が真最中の予定でありまして、通り抜けられない通路があるとか、騒音が気になるなどが懸念されております。どうか、この辺りの事柄につきましては、ご容赦を賜りますようにお願いする次第です。

さて、会場は都心に立地するゆえ狭くて少し窮屈かも知れませんが、国内のどこからでも交通の便は至極です。大会当日は、さわやかな秋空が望めると信じて、多くの方々のご参加を、心からお待ちしております。

(にしだ きみあき・立正大学)

2019 年度「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」支援対象者による海外学会発表体験記

2019 年度「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」の支援対象選考結果が 7 月 2 日付で告知されました。これを受けて、すでに 3 名の支援対象者の方々が海外学会で発表されています。今回、これらの方々をお願いして、海外学会の魅力や研究内容について語っていただきました。これらの体験記に触発され、多くの大学院生、若手研究者が海外学会での発表を目指すことを期待します。

The 18th International Conference on Social Dilemmas(ICSD) 参加記

館石 和香葉

この度、大学院生海外学会発表支援制度のご支援をいただき、2019 年 6 月 3 日から 7 日までアメリカのアリゾナ州・セドナで開催された The 18th International Conference on Social Dilemmas (ICSD)に参加させていただきました。ご支援いただき、誠にありがとうございました。

ICSD は 2 年に 1 度開催される、社会的ジレンマに関する国際会議です。参加者は、全員で 100 名程度と、規模は決して大きくありませんが、欧米のみならず世界各国から研究者が集まり、活発な議論がなされます。参加者数の割に学会の開催期間が長いため、並行セッションがなく、全ての発表を聞くことができるのも特徴の一つです。第 18 回目となる今回の開催地であるセドナは、写真のように赤い砂岩が多くある土地であり、日本ではなかなか見ることでできない風景が多く見受けられました。気温もほぼ毎日 30 度を超えていたのですが、カラッと乾燥した気候であり、湿気がない分、気温の割にとっても過ごしやすかったです。

さて、今年の ICSD は私にとって初めて参加する国際会議でした。特に印象深かったのは、その学際性の高さです。参加・発表していた研究者の分野は、社会心理学・心理学のみならず、経済学、社会学、数理生物学など多岐にわたっていました。専門分野は異なりますが、社会における協力問題のメカニズムを解明し、その解決策を探るというモチベーションは共通しており、その共通の問いが様々な観点や手法で検討されていたのが印象的でした。今まで自分では考えてこなかったような視点も多くあり、発表を聞いた後



に、自分の研究に取り入れるとしたらどのようにできるのだろうか？と考え、わくわくしました。また、普段は社会的ジレンマという枠で 1 つにくられる“Punishment”や“Sustainability”などの個々のテーマが、それぞれ独立したセッションになっていることも驚きでした。どの発表も興味深く、時間が過ぎ去るのが早く感じられました。

私自身はというと、昨年度行った実験の結果を、“The effect of universal institutions on intergroup cooperation”というタイトルで、ポスター発表しました。この研究では、「集団を越えた相互協力はいかにして促進されるのか？」ということが大きな問いになっています。そして、集団を越えた協力を促進する有効な方法として、所属集団に関わらず適用される「普遍的な罰制度」の効果に着目し、その効果を集団実験にて検討しました。ポスターセッションでは、予想以上に多くの方々と議論することができ、大変貴重な経験となりました。なぜ「普遍的」な罰制度が重

要なのか、という本研究の根幹となる話題から、実験の操作や、用いる経済ゲームをこのように変えてみてはどうか、という具体的な話題まで、議論の内容也多岐にわたり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

最後に、今回の ICSD への参加を通じて、社会における諸問題について多角的な視点から考えることの重要性を改めて実感しました。「人間」と「社会」は決して独立したものではなく、互いに影響を与えながら存在しているものだと思います。そのように 2 つの要素が複雑に絡み合うことで生じているであろう社会問題を解決するためには、1 つの視点からのアプローチでは不十分であり、分野の垣根を越えて様々な視点から検討していくことが必要であると考えられます。自身の専門分野についてもまだまだ未熟で、学ぶことは多くありますが、多面的・多角的に問いを考えられるよう、積極的に視野を広げる努力をしていきたいです。

今後も、今回の経験を活かし、より一層研究に邁進していく所存です。末筆ではございますが、このような機会をいただいた日本社会心理学会に心より感謝申し上げます。改めまして、この度はご支援いただき、誠にありがとうございました。

(たていし わかば・北海道大学大学院)

AASP2019 参加記

古橋 健悟

2019 年 7 月、台湾で開催されたアジア社会心理学会 (AASP) に参加しました。今回の参加記では、学会に参加して興味深かったことや、私の感じた「学会の特徴」について書かせていただきます。どうでもいいことですが、国際学会で口頭発表を行うのは、私にとっては今回が初めての経験でした。しかも、発表の受理メールと一緒に、“Kengo Furuhashi has been designated the chair of the session.”と書かれていて、とても焦りました。「何を勝手に chair に designate してんだ…」と思いました。仕方がないので、ネットで「国際学会 座長 言うこと」と検索したりして、座長対策もして学会に臨むことになりました。そんな初学者丸出しの私で恐縮ですが、参加報告をさせていただきます。

AASP は、アジアの諸国から多くの研究者が集まる社会心理の学会です。私が感じた特徴としては、「文化に関する研究が多い」ということです。例えば、Shinobu Kitayama 先生の講演のタイトルは “Cultural Neuroscience” であり、文化によって神経的な変化が起き、ある文化において期待される行動が駆動されるというものでした。他にも、Hoon-Seok Choi 先生の講演は “A new model of individualism-collectivism” に関するものであり、従来の「個人主義 vs 集団主義」のモデルに対して、新しいモデルが提案されています。これらの領域は、自分の研究関心とはあまり近くない領域ではあるのですが、だからこそ新鮮でもありました。また、これは初学者丸出しの私ならではの感想かもしれませんが、「(英語だけど) 話しやすい」というのも感じました。以前アメリカで開催される別の国際学会に参加したこともあるのですが、その時は発表者の方の英語についていけなかったことが多かったのです。しかし今回は、比較的良好に聞き取ることができました。また、後述する自分の発表でも、初めてながらも議論を何とかこなすことができました。そのように「国際学会で英語で発表ではあるけれど、ハードルはやや低め」というのは、AASP の魅力の一つなのかもしれません。

次に、自分の発表について書かせていただきます。私の研究テーマは「援助要請行動 (help-seeking behavior)」です。中でも最近では、援助者を選択する過程に関して検討し、どのような援助者を選択するのが援助要請者にとって最適なのかを明らかにしようとしています。今回の発表では、援助要請を行う時には援助要請者にストレスが生じるということに着目して、ストレスを最低限に抑えるにはどうすれば…? ということを検討しています (なお、五十嵐祐先生との連名です)。ストレスを最小限にするための方略の一つとして、「援助者の切り替え」を提案しています。これは、例えば A さんに援助要請をした後に、もう一回 A さんをお願いするのではなく、B さんへと援助者を「切り替える」ということです。それによって、①一人の援助者にかかる負担が減り、援助要請者の心理的負債感が減少する、②多様な援助を得ることができるというメリットがあるために、援助要請者のストレスが低減されるのではないかと、という仮説をシナリオ実験によって検証しました。シナリオは抑うつと失職という二つを使っているのですが、失職のみで仮説が支持されるという結果でした。援助要請者のストレスを最小限に抑えつつも、援助要請を繰り返す行なうことができることにつながる援助者選択の方略を示した点が、今回の発表の implication であると思っています。セッションの後にも、私のところに来て質問をしてくださった方もいました。ここでも、よい意味での「ハードルの低さ」がありました。

全体としては、上記のように様々な発表を聞けたり、自分の発表 (+ 座長) も何とかこなせたりと、充実した学会でした。AASP は二年に一回開催されます。学会最終日には次の AASP の予告ブースが設置されていて、パンフレットと韓国料理のレシピブックをくれたので、チョロい私は「また来るね～」となりました。これで私の参加記を終わります。末筆ながら、今回の参加は「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」の支援をいただいておりますので、感謝申し上げます。その関係で、参加記を書く機会もいただきました。報告の場を頂きありがとうございました。

(ふるはし けんご・名古屋大学大学院)



アジア社会心理学会参加記

鈴木 啓太

この度は「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」によりご支援いただき、誠にありがとうございます。このご支援を頂き、2019年7月11～13日に台湾・台北市にて開催された第13回アジア社会心理学会(AASP)に参加させていただきました。ほぼ毎日最高気温 35 度越えという酷暑の中での滞在になりましたが、私自身は天候のデータが示すほどの不快感を感じることは不思議となく、むしろ現地の様々な文化に触れることの期待感の方が大きかったことを覚えています。現地の暮らし、先生方との学会外での交流を含め、結果的にとても実りのある滞在になりましたが、ここでは今回の学会で印象的だったこと、①文化を扱う心理学の 20 年の歩みについて、②Well-being 研究の隆盛、の 2 点について稚拙ながら自分の体験をシェアさせて頂ければと思います。

今回の学会のテーマ“Consolidating the future of culture-oriented psychology: Progress and achievements”は、20 年前に同じく台北で開催された第 3 回 AASP のテーマをもとに決められたそうです。多くの著名な Culture-oriented psychologist が Keynote speaker としてこの 20 年の歩みを振り返っておられました。Dr. Steven Heine は、多くの進歩を認める一方、WEIRD (Western, Educated, Industrialized, Rich and Democratic) の研究に終始する風潮がいまだに残っていることを指摘され、「(生物学で例えると)あくまでモデル生物のみを対象にしているに過ぎないこと自覚すべき」とお話しされていました。モデル生物を対象とする研究が多くの知見をもたらすことは間違いありませんが、比較の観点はその知見をさらに豊かにするものであると思います。最終的に役割分担の話になるかと思いますが、このようなスピーチが企画されること自体が、自分たちがどのような役割を担っているのかということに関して自覚的であることの証左であるように思われ、Culture-oriented psychology の営みの方向性はきっと間違っていないのだと、若輩ながら生意気にも感じました。

もう一つ、Well-being 関連の研究が多かったことがとても印象に残っています。Well-being は心理学の社会への貢献を考えたときにとても重要な変数の一つであるといえます。その Well-being の研究が増えたことは、心理学がアカデミアに閉じ籠ることなく社会課題に向き合っていることの証だといえます。一方で、個々の知見を統合する理論に欠けるのではないかと感じました。現実の課題に即した応用可能性が高い研究は多かったのですが、なぜ特定の要因が Well-being に効くのか、そのメカニズムの解明に主眼を置いた研究は少なかったように感じます。長期的な目線に立つと、社会貢献のことを考えても汎化性能の高い理論研究は必要であるように思います。私が不勉強なだけだと思いますが、生物学との接合や、機能主義的な観点からの説明など、様々な発展可能性のある分野だと外野から見て感じます。理論と応用の両者のバランスをとりつつ今後研究が行われることが、さらなる発展につながるのではないかと感じました。

今回の学会は、個々に面白い研究も多くありましたが、それ以上に上記のようにそれらをメタ的にとらえ直す機会が多かったように感じます。これはおそらく日本から外へ出て、自国と他の国の研究的な営みを比較する機会が多かったことがその理由であると思いますが、こういった目線を得られることは国際学会に参加する一つの大きなメリットであるといえるでしょう。このような機会の後押しをしてくださったこの制度に改めて感謝申し上げます。

最後になりますが、支援対象に選出いただくにあたり、選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。別件にはなりますが、本年度より日本社会心理学会編集委員会の編集幹事を務めさせていただいております。裏方の仕事に携わせていただく中で、こういった選考一つ、または会報の作成一つに多くの先生方大変なご協力があることを実感しました。そういったご協力に報いるためにも、今回の学会を通じて学んだことを今後の研究の糧にしていければと思います。改めて選考、研究にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

(すずき けいた・東京大学大学院)



会員異動 (2019 年 6 月 21 日～2019 年 9 月 15 日)

入会

《正会員》

一般会員 伊藤 萌(吉祥寺クローバークリニック公認心理師・臨床心理士)、遠藤 忠(公立大学法人長野大学社会福祉学部准教授)、小谷 侑輝(所属なし)、鹿内 学(株式会社シンギュレイト代表取締役)、芳賀 麻誉美(大阪経済大学経営学部)、橋本 憲尚(佛教大学教育学部教育学科准教授)、Mein-Woei Suen (ASIA University Department of Psychology,)

大学院生 雨宮 有里(神奈川大学大学院)、有野 雄大(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、池田 亜紗(国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科)、伊藤 実佐子(筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻)、伊藤 倫(国立大学法人名古屋大学教育発達科学研究科)、内田 あや(京都大学大学院人間・環境学研究科)、午道 青歩(立命館大学大学院人間科学研究科)、大須 晶子(筑波大学大学院)、奥山 新斗(北海道大学大学院文学院行動科学講座)、片桐 諒子(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)、久保 昂大(九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻健康スポーツ科学コース)、近藤 将人(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、佐藤 和成(北海

道大学大学院文学院/行動科学講座)、佐藤 洋大(名古屋大学大学院情報学研究科)、讃井 知(筑波大学大学院システム情報工学研究科)、清水 真世(広島国際大学大学院心理科学研究科実践臨床心理学専攻)、菅原 優花(東北大学大学院国際文化研究科)、田中 里奈(奈良女子大学大学院人間文化研究科)、陳 晗(立命館大学大学院人間科学研究科)、寺垣内 雅子(広島大学大学院教育学研究科)、友野 貴之(早稲田大学大学院人間科学学術院)、中村 咲恵(広島国際大学大学院心理科学研究科実践臨床心理学専攻)、野間 了子(広島国際大学大学院心理科学研究科)、早坂 太志(上越教育大学大学院学校教育専攻/学校教育研究科)、前浦 菜央(京都大学大学院人間・環境学研究科)、前田 友吾(北海道大学大学院文学院)、間賀田 悠吾(大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科)、三島 爽暉(立正大学大学院心理学研究科)、宮前 奈央子(広島大学大学院教育学研究科)、YANG YISI(早稲田大学アジア太平洋研究科)、行平 大樹(北海道大学大学院文学院行動科学講座)、李 之林(早稲田大学大学院文学研究科)、綿貫 咲穂(東洋大学大学院社会学研究科)

退会

河田 淳、佐々木 駿太

所属変更

山下 玲子(東京経済大学コミュニケーション学部)、渡部 敦子(尚絅学院大学総合人間科学系心理部門)、山口 由美子((株)富士通ラーニングメディア FUJITSU ユニバーシティ室)、谷口 友梨(京都文教大学講師)、山川 樹(東北文化学園大学医療福祉学部保健福祉学科講師)、内田 遼介(流通科学大学人間社会学部専任講師)、金 惠璘(東京大学大学院人文科学系研究科特任助教)、須山 巨基(明治学院大学経済学部・慶應義塾大学文学部研究員)、有吉 美恵(西南学院大学人間科学部心理学科実験助手)、富永 仁志(パナソニック(株)テクノロジーイノベーション本部)、金子 迪大(京都大学大学院大学院生)、関森 真澄(筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻)

『社会心理学研究』掲載(予定)論文

第 35 巻第 2 号 (2019 年 11 月刊行予定)

松島 公望・林 明明・荒川 歩	キリスト教信者におけるキリスト教的宗教意識と主観的幸福感との関連:ローマ・カトリック教会とホーリネス系 A 教団を対象にして
林 幸史	観光写真調査法による観光地の魅力評価
山本 翔子・結城 雅樹	トロック問題への反応の文化差はどこから来るのか? 関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究
中越 みずき・稲増 一憲	メディアフレームと情報の立場性が生活保護の責任帰属に及ぼす影響:「責任がある」のは政府か受給者か

編集後記

学会大会っていいですね。徒に齢を重ね、組織の中で仕事をすると、問題への対処や交渉事が増えて疲弊します。なんとか落としどころを探しても解決した感がなく、成果に乏しいことも少なくありません。学会大会は違います。白熱しても、見解が平行線を辿りそうになっても、それぞれに得るもの、新しいアイデアや深い理解が残ります。目指すものが同じ仲であえて競い合うことは本当に得難いものです。会員の皆様にはこういった機会、大会開催を実現、維持できるよう、力添えいただけると幸いです。まずは 11 月に、「興味深い発表ありがとうございます」「この領域は詳しくないのですが」「素人考えで申し訳ないのですが」と切り出すところから始めましょう、ってそれは違いますね(笑)。(藤島 喜嗣・広報担当)